文化

歴史随想

明智光秀の生涯 ①

仕立てられた大逆臣

徳川幕府安泰への〝礎〟

文・二階堂 省　絵・杉原明雄

二階堂省さん

杉原明雄さん

はじめに

その後、日本の古代、中世、近世の歴史を、もう一度読み直し、その中でゆがめられた歴史が随分とあることに思い当たったのであった。

すべての国の正史と称され、つづられているものの、うちには、その時代の権力や政府におもねる御用学者たちにより都合の良いように書かれ、真実の歴史は圧迫、廃棄され、発表禁止とされるなどして、だんだんと抹消されて行くことに気付いた。

あの慷（こう）慨の士の頼山陽ですらも自衛のために、天保七・八年（一八三六・三七）に出版された「日本外史」にも、家康が天下を得たところで終わりにして、その後の記録には筆を避けている。

このような意見も平成のわが国のように自由に意見を述べ勝手なことを言えるとすれば牢につながれ、果ては首もとんだに違いない。平和なわがまま勝手を言い、批判出来る今日の時代が有難いと思う。

私は中世や近世の歴史を読んでいるうちに、なぜ明智光秀が逆臣なのか、主君を討つと、なぜ逆臣と呼ばれなければならないのか。もしそうだとすれば父を殺し兄も討ち弟を殺し、他人である主君を殺し、主君の妻妾姫などを奪い、側室などに手を出すなどの者は無数に近く多数にいたが、その者たちは皆逆臣であり、狂者であったはずだ。

普通の武将や国主のみならず公卿・皇族の中にも、皇統を継いだ方の中にもあったが、それらは、いかに呼ぶべきであろうかと考えると、ただ一般の動物以上に力の強いもののみが、正当性を主張することが出来る世の中の構造が悲しくなる。

歴史を見ていると、明智光秀のことは随分ゆがめられて書かれ、主君のために己を空（むな）しゆうして思動を励むことを、特に奨励し求められた徳川幕府時代に意識的にゆがめられて書かれたことに気付いた。

主君に危害を加えた者はもちろん、その危険性のある者は逆臣であるという思想を植えつけ、徳川幕府に忠誠を誓わせようとしたことが実にみえみえである。時代の近いところの光秀を大逆臣に仕立てることにより徳川家の安泰を願ったのであることに気付いた。

「逆臣明智光秀」を体（てい）良く歴史の曝（さら）し者にして徳川幕府の制度をより強固にするための礎（いしずえ）にしたと覚った。

明智光秀が京都の小栗栖で農民の手によって討たれた話は、いかにも出来すぎている。天下の主を自負していた信長をクーデターにより倒した武将の死にざまとしては、いかにも哀れな羞（はず）かしい死にざまだと思う時、そこには庶民にさげすまれる光秀像を作り上げるための羽柴藤吉郎秀吉の作意が感じられる。

ましてや六月の真夏（新暦七月の土用の時期に当たる）にドブの溝に潰けられた生首が、レントゲンで骨格の検査も出来ない、歯型調査も出来ない時代にどうして光秀の首だと鑑定できたであろう。

私は史書を読みあさっている間に、貴重な記録を発見したのである。

◇　◇

にかいどう・せい　大正五年生まれ。養老郡出身。本名・村上武晴。著書に「潰された英霊の妻たち」「戦いの歌」など。日本作家クラブ副理事長。岐阜市在住。

すぎはら・はるお　大正二年生まれ。洋画家、大垣美術家協会参与。揖斐郡大野町在住。

1991年（平成3年）11月28日　岐阜新聞掲載

歴史随想

明智光秀の生涯 ②

文・二階堂 省　絵・杉原明雄

郷土の非運の英雄

秀吉、家康に利用される

史書の『丹波志』に、「荒木山城守高干（ゆきと読む）と思ったが山岸徳平氏編の『講和辞典』にはもと、と仮名がふってある）天正十壬年六月十三日、明智光秀に属して山崎戦死」の一文があり、これこそ徳川の目を逃れる控えめの身代わり記述であると思われた。「属して山崎戦死」の文字は当時としては書き得る最大の表現であったに違いない。

はじめに（下）

しかし地理的に京の都より離れすぎていたり、領国の四国に強敵が多すぎた。織田家の宿老柴田勝家の推しに恵まれ、あまつさえその道中を阻む者も懐柔出来るような大義名分のすべての条件が揃っていた。だが、光秀の失脚後は考え方を全く変え、明智光秀は京を制して三日目、征夷大将軍の宣下を受けたが、秀吉は初め征夷大将軍を望んだ。だが、その出自のために許されず、天正十三年七月、従一位関白の官位のみを下された。実に信長が倒れ、光秀が失脚して四年目の後であった。

翌十四年十二月太政大臣に補せられ、豊臣の姓まで賜わり、体力的に経済的に不安や不可能をおぼえたりしていて、なかなか夢の実現にはほど遠かったが、たまたま織田信長は、徳川家康との同盟を得て後顧の憂いなく、京まで三十里（一二〇㌔）という地の利に合わせ、当時としては画期的な新式優秀兵器である鉄砲と、それに必要な火薬の製法、鉄砲の操作にたん能な光秀を惟（い）幕の内に招へいするのとなんら変わりはない。

戦国の武将たちは皆、都に上り、天下に号令する夢を抱いていた。現在の代議士諸公が大臣を夢見、あわよくば首相を、と考えているのとなんら変わりはない。

その十五年後、慶長二十年（一六一五）大坂夏の陣において、秀吉の築いた豊臣氏は二代のみで滅亡、徳川の三百年に移行した。

このような一連の流れを見ていると、比較的に判然としている近世においても主家に背き、主家を滅ぼし、き上げた人物として、常に桧（ひのき）舞台に押し出そうと心掛けているようであるが、これらは皆、三河・尾張出身の愛知県人であり、クーデターの結果、失敗したとはいえ、政治権力の流れを変えた美濃出身の明智光秀）それは、三傑にも劣らぬ岐阜県出身の郷土の非運の英雄であると信じている。

私はこの郷土出身の非業の武将明智光秀の真の姿を記録することにより、歴史を賞（たた）したいと希望してやまない。

平成の現在であれば、明智光秀は確実にギネス・ブックにも記録されるべき百十八歳の天寿を全うした大生涯であった。

◇

引用文の出所については、最終文末に、参考文献をして列挙いたします。ご了承ください。（筆者）

織田信長・豊臣秀吉・徳川家康を近世の三傑として囃（はや）し立て、特に織田信長は岐阜を有名にし築

秀吉は農民出身が縁であって信長に仕え、取り立てられ、一方の旗頭として重用された恩義と信長には絶対に頭が上がらない現実に、奉仕することのみを考尽くした。

時機の幸運に到達している信長の三男信孝を織田の後継から退け（天正十一年五月二日愛知県知多郡美浜町野間で自害）柴田勝家を前月の四月二十四日の昼すぎに倒し、織田政権の後継者たらんと猿知恵の限りを尽くした。

もいただいてはいるが、慶長三年八月十八日、死去するや徳川家康の実力は、わずか二年後の慶長五年（一六〇〇）九月豊臣方の石田三成を破り、天下の覇権を手中に納めたのであった。

1991年（平成3年）12月5日　岐阜新聞掲載

西暦	和暦	年齢	ことがら
一五二八	享禄元	〇	可児郡瀬田長山城下出生か、他にも諸説あり。
一五三八	天文七	一一	明智惣領職に就く、道三から経世術、鉄砲術等教導を受ける。
一五五六	弘治二	二八	斎藤義龍に攻められ、長山城陥落、一族離散、流浪の身となる。
	永禄初年		越前国丸岡（坂井市）の称念寺門前に潜居、五年朝倉氏に仕え、東大味に居住する。
一五六二	永禄五	三四	朝倉義景に仕官、鉄砲指南役をつとめる。
一五六六	永禄九	三八	足利義昭に従う細川藤孝に仕える。

西暦	和暦	年齢	ことがら
一五六八	永禄一一	四〇	七月義昭に供奉し美濃岐阜へ、九月信長とともに、義昭を奉じ上洛、義昭将軍職に、光秀は朝廷公家達との交渉役つとめる。
一五六九	永禄一二	四一	木下藤吉郎・丹羽長秀と共に軍政に携わる、京都の公家・寺社所領の仕置きや庶政で評判を高める。
一五七〇	元亀元	四二	信長の若狭・越前討伐、近江堅田及び摂津の三好三人衆攻撃に功績を挙げる。
一五七一	元亀二	四三	近江に出陣、滋賀郡を付与され、坂本に築城。
一五七三	天正元	四五	越前朝倉氏滅亡後の越前の庶政担当。
一五七四	天正二	四六	大和多聞山城を守り、東濃に侵入した武田勝頼に備える、河内の三好氏及び一向一揆と戦い、高屋城を囲む。
一五七五	天正三	四七	七月、信長より九州の名族惟任（これとう）姓を付与され、日向守に任ぜられる、八月越前攻めに参戦、以後丹波攻略を担い、一一月多紀郡八神城の波多野氏や氷上郡黒井城の赤井氏を攻め、誘降させる。
一五七六	天正四	四八	一月波多野氏離反、敗れて坂本へ帰城、二月丹後へ再出陣、五月信長の石山本願寺攻めに加わる。
一五七七	天正五	四九	光秀発病、六月信長見舞う、七月平癒する、信長の紀州征伐に参戦する。
一五七八	天正六	五〇	松永久秀の大和信貴山城落とす。
一五七九	天正七	五一	丹波の内藤氏の亀山城、波多野氏の八神城を攻める、丹波の氷上城、八神城を陥落し、丹波平定。
一五八〇	天正八	五二	信長から丹波一国支配を命じられる。
一五八二	天正一〇	五四	三月信長の武田勝頼攻めに従軍、五月一四日、安土城での徳川家康接待役拝命、同一七日備中高松城攻めの秀吉救援を拝命、同二六日亀山城で出陣準備、二七日愛宕（あたご）神社参拝、六月一日未明京都本能寺の信長、二条城の信忠を討つ。一三日山崎で秀吉と対戦し敗れ落ち延びる途中、一揆勢に襲撃され、死去。

報道記事から見る
岐阜の偉人たち

古田織部（ふるたおりべ）

- 美濃国本巣郡出身の戦国の武将
- 信長・秀吉・家康の三天下人に仕える
- 織部流の茶道を開く、晩年徳川家茶道指南役（しなんやく）をつとめる
- 桃山文化興隆期のリーダーとして門人が多い
- ゆがみ茶碗を茶の湯に使う
- 慶長20年幕府から死を賜う

本巣郡山口に出生の戦国の落とし子

一五四四（天文一三）年、山口城主古田重安弟重定の長男として誕生、幼名は左介（さすけ）であった。父は、石津郡の桑原家に養子入りしていたが、男子が出生したので、古田家に戻り、上洛し茶道を好み、利休の茶友として活躍し、後には秀吉に仕え、所領三〇〇〇石を付与されるに至っている。

古田氏が、美濃の歴史に登場するのは、美濃国守護土岐家の内乱である一四九五（明応四）年の船田合戦で、敗死した美濃国大野郡中野城主古田勝信であった。戦後、勝信の子総兵衛は、加茂郡細目（ほそめ）郷の大仙寺に蟄居（ちっきょ）し、総兵衛の子重安の時、美濃国守護政房に仕え、山口城主として故郷に近い所に復帰した。古田左介は、重安の甥であったが、二〇歳となった永禄七年、宗家に迎えられ、天正七年、古田宗家の嫡男重清が、播磨三木城攻めで戦死以後、古田氏一族を率（ひき）いることとなった。

重清の嫡男重勝は、一五八五（天正一三）年、それまで一族を率いてくれた左介が、織部正（おりべのかみ）に任ぜられ、山城西岡城主となったとき、古田家の家督を譲られ、美濃国の秀吉の代官をよく務め、やがて伊勢松阪城主となった。

織田信長に仕える

一五六四（永禄七）年、美濃国の攻略を進める織田信長が、根尾川筋の武家として、左介とよしみを通じていた。同一五六七（永禄一〇）年九月岐阜入城を果たした信長は、天下統一事業に本腰を入れた。永禄一二年、二五歳の左介は、信長の命を受け、摂津茨城城主中川清秀（きよひで）の妹せんと結婚し、信長に従い、諸戦に参戦した。

一五七六（天正四）年、山城国上久世荘（かみくぜ）（信長直轄地か）で代官をし、庶政に当たっている。同六年、反乱した荒木村重と縁戚関係から味方していた中川清秀の誘降（ゆうこう）の使者をつとめ、誘降せしめた。この時期、左介は、信長の近臣として、代官・使者を務め、説得力のある人柄をうかがうことができる。

天正七年には、丹波・丹後攻略の明智光秀の一翼を担う中川清秀軍の与力として、活躍している。同一〇年六月の本能寺の変では、中川清秀とともに、秀吉軍に属して戦った。